

スペイン語の時制 - 日本語との対照

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

高垣, 敏博
東京外国語大学総合国際学研究院言語文化部門 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/19923>

出版情報 : 語学研究所論集. (15), pp. 161-180, 2010. 東京外国語大学語学研究所
バージョン :
権利関係 :



<研究ノート>

スペイン語の時制 ―日本語との対照

山村 ひろみ・高垣 敏博

はじめに

スペイン語におけるアスペクトを説明するために、まず、以下の“hablar 話す”の1人称単数に活用された直説法の時制形式を見ていただきたい。¹

presente (現在) : [yo] hablo

pretérito perfecto simple(点過去) : [yo] hablé

pretérito imperfecto(線過去) : [yo] hablaba

pretérito perfecto compuesto(現在完了) : [yo] he hablado

pluscuamperfecto(過去完了) : [yo] había hablado

上記は後述するスペイン語の時制と日本語のそれとを対照した際に頻出したもので、スペイン語の動詞体系を網羅したものではないが、これらを見ただけでもスペイン語における文法カテゴリーの輪郭はつかめるであろう。これらのうち、スペイン語における文法カテゴリーとしての「アスペクト」を語る際に、まず取り上げられるのは、pretérito perfecto simple(以下, ps.)と pretérito imperfecto(以下, imp.)の2つの時制である。

ps.と imp.については、その名称が示すように、ともに過去(pretérito)の事態に言及す

¹ 最初のスペイン語は、王立スペインアカデミー(Real Academia Española 以下, RAE)で採用されている時制の名称、括弧内の日本語は日本のスペイン語教育において用いられている時制の名称である。因みに、これらの時制のうち pretérito perfecto simple, pretérito imperfecto, pretérito perfecto compuesto はそれぞれ、同じロマンス系言語であるフランス語の passé simple, imparfait, passé composé, イタリア語の passato remoto, passato imperfetto, passato prossimo に対応する。また、1人称単数の主格人称代名詞 yo が括弧内に入っているのは、スペイン語では主語の省略が起ることを示したものである。なお、本稿で用いられるスペイン語はイベリア半島で話されるスペイン語の実態に基づくものである。スペイン語文のチェックは Beatriz Velázquez del Pozo さん(1986年生まれ、スペイン、マドリッド出身の女性)にお願いした。ご協力に感謝します。

るが、「完了性」の有無において最小対をなす、といった解釈が一般的である。この解釈における「完了性」とは、当該事態の開始から終結までをひとまとまりとして捉えることを指し、この見方に従うならば、「完了性」に関して有標の時制とされる *ps.* は過去の事態が開始し終結したことを、また、「完了性」に関して無標の時制とされる *imp.* は開始や終結といった当該事態の時間限定性には関与しないということになる。*ps.* と *imp.* の差異をこのような「アスペクト」の違いとする見方（以下、アスペクト説）の妥当性は、例えば、*ps.* は当該事態の時間限定性を示す副詞句と共に起するが、*imp.* はそのような副詞句とは共に起しにくい、といった事実と拠っている。²

しかしながら、*ps.* と *imp.* の機能的差異をこのような「アスペクト」の違いとする見方に異を唱える研究者もいる。その代表である Rojo & Veiga (1999)³ によれば、*ps.* と *imp.* の機能的差異は「アスペクト」の違いではなく「時間関係」の違いということになる。彼らの言う「時間関係」とは、「基準時」とそれに対する「方向性(orientación)」からなるもので、この見方によれば、*ps.* の基準時は「発話時」、それに対する方向性は「前時性」、一方、*imp.* の基準時は「過去時」、それに対する方向性は「同時性」ということになり、*ps.* と *imp.* は基準時・方向の双方において異なっているため、両者はアスペクト説が主張するような最小対ではなくなる。*ps.* と *imp.* の違いをこのような「時間関係」の違いとする解釈（以下、時間説）の妥当性は、例えば、*ps.* は *hace tres años* “(今から)3年前”のような発話時基準の副詞句とは共に起可能だが、*hacia tres años* “(その)3年前”のような非発話時基準の副詞句とは共に起不可能なのに対し、*imp.* にはそのような制約がないこと、⁴ また、主節が過去時制、従属節が現在形の直接話法を間接話法にすると、従属節の現在形は *imp.* に転換されるという「時制の一致」現象⁵ に支えられている。本稿は、アスペクト説と時間説の優劣を論じるものではないのでこれ以上の説明は省くが、*ps.* と *imp.* の機能的差異を考察するにあたっては、この二説は無視することができないことだけは指摘しておきたい。⁶

また、*ps.* と *imp.* とは別にスペイン語の「アスペクト」の違いとして取り上げられることが多いのは、スペイン語の名称の中に “perfecto” という語が含まれている時制と

² Cf. García Fernández (1998), pp.28-31.

³ Cf. Rojo & Veiga (1999), pp.2919-2922.

⁴ Cf. Yamamura (2000), pp.124-126.

⁵ Cf. 山村 (1994).

⁶ RAE が刊行した最新の文法書 *Nueva gramática de la lengua española* (2009)では、*ps.* と *imp.* の機能的差異に関して提示されたこれら二説は対立するものではなく相互に関係するものである、という第三の解釈の可能性が提示されている。cf. RAE(2009), pp.1743-1744.

そうでない時制との対立に関してである。この対立は通常「完了アスペクト」と「未完了アスペクト」の対立と理解されている。⁷ このうち “pretérito” と “perfecto” の機能を共有する ps. と pretérito perfecto compuesto (以下, pc.) については, “simple /compuesto” という語が示す形態的な違いだけでなく, ps. は当該事態が発話時以前に生起したことのみを示すが, pc. は当該事態が発話時以前に生起したことに加え, その事態が発話時と何らかの関係を持つことをも示すといった機能的な違いもあるという解釈が一般的である。⁸

今回の時制をめぐる日西対照ではいくつかの迂言形式も出現したが, スペイン語においては, この迂言形式の機能を規定する際にも「アスペクト」という用語が用いられることが多い。以下は, その代表的迂言形式 (いわゆる「進行形」) である “estar + gerundio(現在分詞)” を “hablar 話す” の 1 人称単数で活用させたものである。

presente: [yo] estoy hablando

pretérito perfecto simple: [yo] estuve hablando

pretérito imperfecto: [yo] estaba hablando

pretérito perfecto compuesto: [yo] he estado hablando

pluscuamperfecto: [yo] había estado hablando

“estar+gerundio”は一時的状態を示すといわれる繫辞動詞 *estar* と動詞の現在分詞からなる迂言形式で, 一般に “aspecto durativo 継続アスペクト” あるいは “aspecto progresivo 進行相” を表すと解釈されている。⁹ この迂言形式で注目すべきは, 「継続」「進行」のように, 通常, 「未完了アスペクト」の下位分類と見なされる機能を持つとされながら, presente や imp. のような「未完了アスペクト」の時制だけでなく, ps., pc., pluscuamperfecto のような「完了アスペクト」の時制とも組むことがあるという点である。

⁷ この見方によれば, pres. と imp. は「未完了アスペクト」, また, ps. と pc. は「完了アスペクト」ということになるが, そのような考え方をしない研究もある。例えば, Alarcos(1984)では, 「アスペクト」という用語は ps. と imp. の機能的差異についてしか使用されていない。

⁸ スペイン語と同じくロマンス系言語のフランス語とイタリア語では, スペイン語の ps. に対応する *passé simple*, *passato remoto*, スペイン語の pc. に対応する *passé composé*, *passato prossimo* の差異は専ら「文語」対「口語」といったレジスターの違いであり, 機能的には等価のように解釈されているようである。しかし, スペイン語の ps. と pc. の間にはそのようなレジスターの違いはなく, ps. は pc. と同じく口語でもまったく自然に使用される。

⁹ Cf. Gómez Torrego (1988), p.147, García Fernández (2006), pp.136-142.

以上がスペイン語における文法的アスペクトの概要である。以下、アンケート項目についてのスペイン語の状況を示す。¹⁰

アンケート項目の回答

(1) サパテロさんは／あの人は もう来た。

a. El señor Zapatero/Aquel señor ya ha venido.
“venir 来る”pc. 3sing.
the mr. Zapatero/ that man already has come

b. El señor Zapatero/Aquel señor ha venido ya.
“venir 来る”pc. 3sing.
the mr. Zapatero/ that man has come already

(1)の日本語は上記の a, b に対応する。すなわち、日本語の完了の「タ」はスペイン語の pc.に対応する。なお、a と b の違いは副詞 “ya もう”の位置にあるが、これが回答のアスペクトに影響することはない。

(2) サパテロさんは／あの人は もう来ている。

a. El señor Zapatero /Aquel señor ya ha venido [ha venido ya].
the mr. Zapatero/ that man already has come [has come already]

(2) の日本語が示す「結果状態」の「テイル」は、スペイン語では(1)と同じ表現になる。なお、(1)(2)の日本語が示す言語外現実とは、以下の b によっても示すことができるが、この文では動詞が “venir 来る” から主語の所在を示す “estar ある/いる”に、また、時制も pc.から pres.に変わっている。なお、この b では、副詞 “ya もう” の存在

¹⁰ 略号は、次のとおり。pres. = presente, ps. = pretérito perfecto simple, imp. = pretérito imperfecto, pc. = pretérito perfecto compuesto, pcpl. = pluscuamperfecto, 現分 = 現在分詞, 過分 = 過去分詞, sing. = singular, pl. = plural, 男 = 男性, 女 = 女性, 単 = 単数, 複 = 複数。なお、スペイン語では主語省略が起こるため、動詞の活用形については、次例のように時制のほかにも、主語の人称・数も付加し、主語省略の場合は、注釈で「主語人称代名詞-活用形」のように示す。

例 Hablo español.
“hablar 話す” pres. 1 sing.
I-speak Spanish

が不可欠である。

b. サパテロさんは／あの人はもうここにいる。

El señor Zapatero/Aquel señor ya está aquí [está aquí ya].
 “estar いる”pres.3sing.
 the mr. Zapatero/ that man already is here [is here already]

(3) サパテロさんは／あの人はまだ来ていない。

a. El señor Zapatero /Aquel señor no ha venido todavía.
 “venir 来る”pc.3sing.
 the mr. Zapatero/ that man not has come yet

b. El señor Zapatero/Aquel señor todavía no ha venido.
 “venir 来る”pc.3sing.
 the mr. Zapatero/ that man yet not has come

c. サパテロさんは／あの人はまだここにいない。

El señor Zapatero/Aquel señor todavía no está aquí[no está aquí todavía].
 “estar いる”pres.3sing.
 the mr. Zapatero/ that man yet not is here[not is here yet]

(3) の日本語が示す「結果状態」の「テイル」の否定は、スペイン語では a, b のように(1)(2)で示された pc.の否定表現になる。

(4) サパテロさんは／あの人は まだ来ない。

El señor Zapatero/Aquel señor no viene todavía[todavía no viene].
 “venir 来る”pres.3sing.
 the mr. Zapatero/ that man not comes yet [yet not comes]

(4)の日本語はスペイン語では“venir 来る”の pres.の否定によって示される。この文を(3)の日本語に対応した(3)a, (3)b と比較するならば、主語の人物が発話時において当該の場所に到着していないことを示す、という点で両者は共通している。しかし、pc.を用いた(3)a, (3)b には当該事態[el señor Zapatero/aque señor venir サパテロさん/あの人が来ること]が生じたか(p), 生起しなかったか(~p)の選択の観点が存在するが、pres.

を用いた(4)にそのような観点はなく、発話時における指示対象の状況が示されているだけである。

(5) サパテロさんは／あの人は もう(すぐ)来る。

El señor Zapatero/Aquel señor ya viene [viene ya].
“venir 来る”pres.3sing.
the mr. Zapatero/ that man already comes [comes already]

未来の事態に言及する(5)の日本語は、スペイン語では pres.によって示される。

(6) (あつ、)サパテロさんが来た。

a. Mira, ahí viene el señor Zapatero.
“mirar 見る”命令形 2sing. “venir 来る”pres.3sing.
look there comes the mr. Zapatero

b. (あつ、)バスが来た。

Mira, ahí viene el autobús.
“mirar 見る”命令形 2sing. “venir 来る”pres.3sing.
look there comes the bus

(6)のような日本語の「発見」の「タ」は話し手の視界に主語の示す対象が(突如)出現したことを表すが、そのような場合、スペイン語では上記 ab のように pres.が用いられる。同様の状況で、pc.が出現するのは極めてまれである。¹¹

(7) おととい、サパテロさんが来たよ。

Anteayer vino el señor Zapatero.
“venir 来る”ps.3sing.
the day before yesterday came the mr. Zapatero

(7)のように発話時を基準とした過去のある時点においてある事態が生起したことを示す場合、スペイン語では ps.が用いられる。これは先に見た ps.と imp.の機能的差

¹¹ RAE のスペイン語コーパス(CREA)でスペインを領域として “Mira, ahí 見て、あそこに...”を検索した結果、全部で 18 例あった。そのうち解釈上、「発見」の「タ」に対応する例は 5 例あったが、すべて pres.で表されていた。

異を説明する二つの説,「アスペクト説」と「時間説」のどちらにおいてもうまく説明される現象である. なお, (6)a,b, この(7)のスペイン語文では主語が動詞に後置されているが, この点については(8)で述べる.

(8) おととい、サパテロさんは来なかったよ。

El señor Zapatero no vino anteayer.
 “venir 来る”ps.3sing.
 the mr. Zapatero not came the day before yesterday

(7)の否定文であるが, 動詞の時制形式には変化はない. ここでは, スペイン語における語順について若干触れておきたい. 日本語では(6)(7)のように, 動詞が主語の出現を表すような場合, 当該主語は格助詞「ガ」で表示されることが多いが, 同様の場合, スペイン語では主語が動詞に後置される傾向にある. 一方, (8)のように, 日本語の主語が主題の「ハ」で表示されている時, 対応するスペイン語の主語は動詞に前置されるのが普通である.

(9) (私は)あのリンゴをもう食べた。

Ya he comido aquella manzana [He comido ya aquella manzana].
 “comer 食べる”pc.1sing.
 already I-have eaten that apple

(10) 私はあのリンゴをまだ(a)食べていない／(b)食べない。

a. No he comido todavía aquella manzana[Todavía no he comido aquella manzana].

“comer 食べる”pc.1sing.

not I-have eaten yet that apple

b. No como todavía aquella manzana[Todavía no como aquella manzana].

“comer 食べる”pres.1sing.

not I-eat yet that apple

(9)(10)の日本語は「完了」の「タ」の用法を問題としたものである. これらに対するスペイン語は(1)(3)(4)の結果と同じで, 動詞の自他によって選択される時

制・アスペクトが変化することはない。

(11) あの人は今(ちょうど)そのリンゴを食べています／食べているところです。

Aquel señor está	comiendo	la manzana justamente ahora.
“estar である”pres.3sing. “comer 食べる”現分		
that man is	eating	the apple just now

(11)が扱っているのは、日本語の「テイル」の進行用法に対応する形式の有無であるが、スペイン語は先述した“estar+gerundio(現在分詞)”という迂言形式を用いる。この迂言形式に用いられる“estar”は名詞以外の句（形容詞・現在分詞・過去分詞・前置詞句・副詞）に従えることのできる繫辞動詞で、補語が形容詞やそれ相当のものの場合には一般に主語の一時的状態を、また、補語が前置詞句・場所の副詞の場合には主語の所在を示す。

ところで、いわゆる「進行」を表す形式としては、この迂言形式のほかに pres も挙げられることがある。¹² 確かに、この“estar+gerundio”と pres.は同じ言語外現実と言及することができるが、その機能が全く等価とえば、疑問に思われる点も少なくない。例えば、pres.は一般に指示対象の「属性」を表すが、“estar+gerundio”は特定の時空間における指示対象の状態を示すのが普通で、その「属性」を表すとはまでは言えない。

(12) 窓が(a)開いている。／窓が(b)開いていた。

a. La ventana está	abierta.
“estar である”pres.3sing. “abrir 開ける”過分女単	
the window is	opened

b. La ventana estaba	abierta.
“estar である”imp.3sing. “abrir 開ける”過分女単	
the window was	opened

(12)の「結果状態」を表す「テイル」に対応する上記のスペイン語は

¹² Cf. Butt & Benjamin (2000), p.201.

“estar+participio(過去分詞)”からなっている。この“estar+participio”という構文では、(11)の「進行」を表す迂言形式で用いられたのと同じ繫辞動詞 *estar* が用いられる。しかし、日本語とは違って、それに後続する動詞の形態は、「進行」の場合は現在分詞、「結果状態」の場合は過去分詞というように、用法により異なる。また、「結果状態」を表す“estar+participio”の過去分詞は主語の性数に一致する。なお、(12)bでは *imp.*が出現しているが、これは当該日本語文が、発話時における状況(状態)を表す(a)と同様に、過去のある時点における状況(状態)を示したものと解釈されたからである。もし当該事態[*la ventana estar abierta* 窓が開いていること]が時間的に限定されたものであることを示唆する時の副詞句あるいは文脈があれば、(12)bはスペイン語の *ps.*によって示されることになる。このような *ps.*と *imp.*の出現のあり方と共起する時の副詞句との関係については (18)で再度触れる。

一方、アンケートでは「窓が開けてある」のような行為者の存在を含意する構文の有無も問われていたが、スペイン語には、そのようなものとして、以下の構文が存在する。

c. 私はその窓を開けてある。

Tengo	abierta	la ventana.
“tener 持つ”pres.1sing. “abrir 開ける”過分女単		
I-have	opened	the window

この構文は“tener 持つ+participio 過去分詞+直接目的語”からなるもので、対応する日本語に明らかなように、*participio* の示す当該事態の行為者は含意ではなく *tener* の活用形によって必ず明示される。その意味で、この構文は「物ガ V テアル」よりむしろ「人ハ物ヲ V テアル」に対応すると言えるだろう。また、この構文における“*participio*”は(12)のように主語の性数に一致するのではなく、動詞の直接目的語の性数に一致する。さらに、日本語の「物ガ V テアル」あるいは「人ハ物ヲ V テアル」構文に出現する V は、その働きかけの結果が直接可視できるようなものが多いが、スペイン語の“*tener +participio+直接目的語*”では、次の例が示すように、V に思考・知覚といったその結果が不可視な動詞も出現することができる。¹³

¹³ しかしながら、日本語の「V テアル」においても、「私はその対策を考えてある」のように、V としてその結果が不可視な動詞が出現することもある。ただし、このような「V テアル」は後述する「準備」の「V テアル」と解釈することもできる。

c. 私は…ということを*理解してある/*聞いてある。

Tengo entendido/oído que...
 “tener 持つ”pres.1sing. “entender 理解する/oír 聞く”過分男単
 I-have understood/heard that ...

(13) 私は毎朝新聞を読む／読んでいる。

a. Leo el periódico todas las mañanas.

“leer 読む”pres.1sing.

I-read the newspaper all the mornings

[Todas las mañanas leo el periódico.]

“leer 読む”pres.1sing.

all the mornings I-read the newspaper

b. 私は最近毎朝新聞を読んでいる。

Últimamente estoy leyendo el periódico todas las mañanas.

“estar である”pres.1sing. “leer 読む”現分

recently I-am reading the newspaper all the mornings

[Todas las mañanas estoy leyendo el periódico últimamente].

“estar である”pres.1sing. “leer 読む”現分

all the mornings I-am reading the newspaper recently

スペイン語における現在の習慣は a が示すように pres. で表すのが一般的であるが、b のように “estar+gerundio 現在分詞”からなる「進行」の迂言形式で表されることもある。前者の場合、当該事態は主語が示す対象の「属性」として解釈されるが、後者の場合は、特定期間内の習慣として解釈されることが多い。

(14) あなたは(あなたの)お母さんに似ている。

a. Te pareces a tu madre.

“parecerse 似る (再帰)”pres.2sing.

yourself you-look to your mother

b. Eres	parecida	a tu madre.
“ser である”pres.2sing.	“parecer 見える”過分形容詞用法女単	
you-are	similar (looked)	to your mother

日本語文に対応するスペイン語の形式は、a の再帰動詞 “parecerse 似る”の pres., あるいは、b の “parecer 見える”の過去分詞が形容詞的に使われたものと繫辞動詞 “ser である”の pres.の組み合わせになる。なお、すでに述べたように、スペイン語には “estar+gerundio”という「進行」の迂言形式があるが、ここでその形式は用いられない。

ところで、b の表現で用いられる繫辞動詞 “ser である”とこれまでの回答中に出現した繫辞動詞 “estar”の違いについて、以下簡単に触れておきたい。

スペイン語には英語の be 動詞に相当する動詞に前述の “ser”と “estar”の 2 種類がある。“estar”については、上でも述べたように、補語として名詞以外の句（形容詞・現在分詞・過去分詞・前置詞句・副詞）を従え、当該補語が形容詞やそれ相当のものの場合には、一般に主語の一時的状態、当該補語が前置詞句・場所の副詞の場合には、主語の所在を示す。一方、“ser”は “estar”が取ることのできる句に加えて名詞句もその補語として従えることができ、主語の「属性（特徴）」を示す。また、補語が形容詞あるいは形容詞相当の語句の場合には、次の例が示すように、繫辞動詞の選択によって、文の意味が異なってくることがある。¹⁴

c. (i) El cielo es	azul.
“ser である”pres. 3 sing.	
the sky is	blue.
(ii) El cielo está	azul (hoy).
“estar である”pres. 3 sing.	
the sky is	blue

c(i)は単に空の色を定義した文であるが、c(ii)は特定の時空間 (“hoy 今日”) の空の色に言及したものであり、日本語の「今日は空が青い」に相当する。

¹⁴ すべての形容詞が “ser”と “estar”の両方と結びつくわけではない。多くの形容詞は “ser”あるいは “estar”の一方しか選択しない。cf. Marín (2004).

(15) 私はその頃毎日歩いて学校へ通っていた。

a. Entonces yo iba a pie a la escuela todos los días.

“ir 行く”imp.1sing.

then I went (imp.) on foot to the school all the days

b. 私はその頃～歩いて行くのが常だった。

Entonces yo solía ir a pie ~ .

“soler～するのが常である”imp.1sing. “ir 行く”不定詞

then I used to go on foot

質問項目にあるような過去の習慣は、スペイン語では一般に当該動詞の imp.によって表される。しかし、b が示すように、英語の used to のような “soler+infinitivo 不定詞...するのが常である” という迂言形式も存在する。この迂言形式は「未完了アスペクト」の時制によって表されるのが普通である。

(16) 私はマドリードに行ったことがある。

He estado en Madrid.

“estar いる”pc.1sing.

I-have been in Madrid

日本語の経験を表す文は、スペイン語では pc.によって表される。(16)の「～に行ったことがある」は、[yo estar en Madrid 私がマドリードにいること]という所在を表す命題の pc.に対応するが、このほかに文字通り [yo ir a Madrid 私がマドリードに行くこと]という命題の pc.で表すことも可能である。なお、スペイン語には“estar+gerundio”の「進行」を表す迂言形式が存在するが、経験文をこの迂言形式で表すことはない。

(17) やっとバスは 走り出した／走り始めた。

a. Por fin el autobús se ha puesto en marcha.

“ponerse en marcha 動き出す”pc.3 sing.

at last the bus itself has put in march

b. Por fin el autobús ha arrancado.

“arrancar 動き始める”pc. 3sing.

at last the bus has started

c. ついに雨が降り始めた.

Por fin ha empezado

a llover.

“empezar 始める”pc. 3 sing.

“llover 雨が降る”不定詞

at last ϕ -has begun

to rain

アンケートの説明によれば、この質問の目的は「始動」を表すアスペクト表現の有無の確認ということであったが、(17)に対応するスペイン語文はこの点においていささか問題がある。なぜならば上記の a, b とともに pc.で表現した “ponerse en marcha(事物が)動き出す” “arrancar(機械が)始動する”という動詞句は乗り物や運動する機械類専用に使われる動詞句だからである。そこで、質問文とは別に c を追加した。スペイン語では、この c で用いられた “empezar a +infinitivo 不定詞...し始める”という迂言形式が「始動」を表すもっとも一般的な形式である。

(18) きのう彼女はずっと寝ていた。

a. Ayer ella estuvo todo el tiempo en la cama.

“estar いる”ps.3.sing.

yesterday she was(ps.)

all the time

in the bed

b. Ayer ella estuvo durmiendo todo el tiempo.

“estar である”ps.3.sing.

“dormir 眠る”現分

yesterday she was(ps.)

sleeping

all the time

この項目の意図は「長時間の継続」を表す表現の確認ということである。そこで(18)に対応するもっとも自然なスペイン語として挙げたのが上記 a, b である。この a, b はそれぞれ日本語の「寝る」という動詞を “estar en la cama 床につく”，また，“dormir 眠る”の「進行」表現に換えたものである。

ところで、「長時間の継続」をスペイン語の文法的アスペクトという観点から見たとき重要なのは、当該事態の継続時間の長短ではなく、その事態の開始あるいは

は終結が表示（あるいは含意）されているかどうかである．本稿の最初でも述べたように，スペイン語のアスペクトでまず問題になるのは過去の2つの時制，ps. と imp. の機能的差異であるが，それを「アスペクト」の違いと解釈する一派にとっては，当該事態の開始あるいは終結の表示の有無，すなわち，その時間限定性の有無こそが ps. と imp. の違いを説明するものとなる．この「アスペクト説」によれば，ps. は当該事態の時間限定性の有無に関して有標であり，imp. は無標ということになるが，その根拠は，上記の a, b が示すように，“todo el tiempo ずっと”のような期間を示す副詞句は ps. としか共起しないという事実にある．ここで看過できないのは ps. と共起する期間を示す副詞句の性質で，上記 a, b のスペイン語文が示すように，その期間は特定されていなくてもよい．

(19) 私はそれをちょっと食べてみた。

a. Lo he probado[probé] un poquito.

“probar 試食する”pc.[ps].1sing.

it I-have tasted[tasted (ps.)] a little

b. 私はその石を持ち上げようとしてみた。

He probado[Probé] a levantar la piedra.

“probar 試す”pc. [ps.]1 sing “levantar 上げる”不定詞

I-have proved to raise the stone

スペイン語の「試行」表現として代表的なものとしては，上記の “probar 試す” をあげることができる．「試行」対象が a のように具体的な物の場合は，それが “probar” の直接目的語になる．一方，「試行」の対象が b のように何らかの行為の場合には，“probar a+infinitivo 不定詞...を試みる”という迂言形式を取る．なお，この迂言形式が「完了アスペクト」の時制で表された場合には，不定詞の示す事態は「試行」されたものの失敗に終わったことが含意されることが多い．

(20) あの人はそれ(ら)をみんなに分け与えた。

a. Aquel señor los repartió entre todos.

“repartir 分ける”ps.3sing.

that man them shared out (ps.) between all

b. あの人はみんなにそのバラをあげた。

Aquel señor les dio a todos las rosas.
 “dar 与える”ps.3 sing.
 that man them gave to all the roses

「みんなに分け与える」という「与える」という行為を繰り返し行ったという意味は、主に動詞 *repartir* の接頭辞 *re-*、日本語の間接目的語に対応する *entre todos* によって示されており、スペイン語動詞のアスペクト形式には直接関係していない。なお、アンケートの質問表には「多くの（間接）目的語に対する多回的なアスペクト表現」とあったので、b のように間接目的語の指示対象が複数であることが明示された場合もあげておく。

(21) さあ、(私たちは)行くよ！

a. Bueno, ¡ vamos !
 “ir 行く”pres.1pl.
 good we-go

b. Bueno, ¡vámonos !
 “irse 立ち去る”命令.1pl.
 good we-go ourselves

(21)の日本語には2通りの解釈が考えられる。ひとつはある目的地へ向かって行くことを勧誘する解釈で、もうひとつは今いる場所を立ち去ることを勧誘する解釈である。スペイン語では、後者の場合、“ir 行く”に再帰代名詞を付加した動詞句が使われる。

(22) 地球は太陽の周りを回っている。

La tierra gira alrededor del sol.
 “girar 回る”pres.3sing.
 the earth revolves around of-the sun

(22)のような「恒常的真理」の表現は、スペイン語では *pres.*が使用される。

(23) あの木は今にも倒れそうだ。

Aquel árbol está a punto de	caerse.
“estar a punto de まさに～しようとしている”pres.3sing. “caerse 倒れる”不定詞	
that tree is to point of	fall-itself

(23)の日本語が示す動詞の「将然相」に特に注目するならば、対応するスペイン語形式は上記のような “estar a punto de +infinitivo 不定詞 まさに...しようとしている”という迂言形式の pres.になる。

(24) (私は)あやうく転ぶところだった。

- a. Estuve a punto de caerme.
“estar a punto de まさに～しようとしている”ps.1sing. “caerse 転ぶ”不定詞
I-was (ps.) to point of fall-myself
- b. Por poco me caigo.
“caerse 転ぶ” pres.1.sing.
nearly myself I-fall
- c. Casi me caigo.
“caerse 転ぶ”pres.1.sing.
almost myself I-fall

(24)のような日本語の「未実現（未遂）事態」の表現に対応するスペイン語は大きく分けて2種類ある。ひとつはaのように(23)の「将然相」の対応形式 “estar a punto de+infinitivo 不定詞” の ps.を用いた表現であり、もうひとつはb,cのように当該事態の pres.と “por poco” “casi”という副詞を組み合わせた表現である。このうち後者の “por poco/casi +pres.”の表現は、スペイン語の「未実現（未遂）」表現の特異性を如実に示したものである。

いわゆる「未実現（未遂）」表現とは、ある事態が発話時以前においてもう少しで実現しそうであったが結局実現せずに終わったことを示すもので、日本語や英語では専ら過去時制が用いられるが、スペイン語の “por poco”という副詞を伴った動詞文では常に非過去の pres.が用いられ、“casi”を伴った動詞文でも pres.が用いられることが多い。ある事態の「未実現（未遂）」というのをその事態の「未完了」と考えるならば、その表出にはアスペクト的に「未完了」とされる imp.の出

現こそが期待される場所であるが、この imp. がスペイン語の「未実現（未遂）」の表現として用いられることはない。この事実はスペイン語の 2 つの過去時制、ps. と imp. の違いをアスペクト的に説明しようとする「アスペクト説」にとっては都合の悪いものである。一方、それは ps. と imp. の違いをそれぞれが表示する時間関係の違いと捉える「時間説」にとっては、逆に、同説の正当性を保証するものとなる。「時間説」によると、imp. の出現にはその基準時として（発話時とは異なる）過去のある時点が必要となるのだが、通常、「未実現（未遂）」表現の基準時は発話時である。つまり、「時間説」に従えば、「未実現（未遂）」表現において imp. が出現しないのは、同表現では imp. の出現に必要な過去の基準時が保証されないからである、と簡潔に説明されることになるのである。¹⁵ また、「時間説」は「未実現（未遂）」を表すために“estar a punto de+infinitivo 不定詞”という「将然相」の ps. が用いられることもうまく説明することができる。「時間説」によれば、ps. は発話時を基準時としながら、それに対して「前時関係」にある事態を表示するのだが、この ps. が示す「前時関係」とは、実質上当該事態の生起に等しい。言い換えるならば、「時間説」に従えば、ps. は当該事態が発話時以前において「生起」したこと、それのみを示す時制なのである。このことを踏まえて再び a のスペイン語文を見るならば、それは[yo estar a punto de caerme 私があやうく転ぶところであること]というそれ自体「未実現（未遂）」の意味を持った命題が生起したことを示したものであるということになる。

(25) 明日お客が来るので、パンを買っておく。

Como mañana	tengo	visitas,	voy a	
	“tener 持つ”pres.1sing.		“ir a～のつもりである”pres.1sing.	
as	tomorrow	I-have	visits,	I-go to
dejar		comprado		el pan.
“dejar～しておく助動詞的用法”不定詞		“comprar 買う”過分		
leave (不定詞)		bought (過分)		th bread

(25)の質問項目は、日本語の「～シテオク」のような「準備」を表す補助動詞相

¹⁵ スペイン語の「未実現（未遂）」表現の詳細については、山村(2009)を参照されたい。

当のものがあるか否かということであったが、スペイン語にはそれに対応するものとして、上記のような “dejar+participio 過去分詞+直接目的語” という迂言形式がある。ただ、日本語の「～シテオク」はそれだけで未来時に言及することができるが、対応するスペイン語の “dejar+participio 過去分詞+直接目的語” の pres. がそれだけで未来時に言及することは難しく、“ir a +infinitivo 不定詞...するつもりである” のような近接未来を表す迂言形式の助けを借りる必要がある。

(26) 私は市場に行った時、この袋を買った。

Cuando	fui	al mercado,	compré	este bolso.
	“ir 行く” ps.1sing.		“comprar 買う” ps.1sing.	
when	I-went (ps.)	to-the market	I-bought (ps.)	this bag

(27) 私は市場に (a) 行く時／(b) 行く前に、この袋を買った。

a. Cuando iba al mercado, compré esta bolsa.
 “ir 行く” imp.1sing. “comprar 買う” ps.1sing.
 when I-went (imp.) to-the market I-bought (ps.) this bag

b. Compré esta bolsa antes de ir al mercado.
 “comprar 買う” ps.1sing. “antes de～する前に” “ir 行く” 不定詞
 I-bought (ps.) this bag before of go (不定詞) to-the market

(26)(27)は主節と従属節の時間関係を表す際のアスペクトの実態を検証するものである。(26)では、まず[私が市場に行くこと]という事態が起こり、そして[私がこの袋を買う]という事態がそれに継起して起こったという解釈が成り立つが、そのような時、スペイン語では主節と従属節の両方において ps.が出現する。一方、(27)a では、主節の事態は従属節の事態が起こっている時間内のどこかで起こったものである。このような時、スペイン語では従属節の事態は imp., また、主節の事態は ps.によって表される。

一方、従属節事態が主節に後続する際には注意が必要である。(27)b がその例であるが、主節より後に起こる事態は “antes de +infinitivo 不定詞” という迂言形式の不定詞によって示されている。しかし、このように “antes de +infinitivo 不定詞” という形式が用いられるのは、主節と従属節の主語が同一の対象を指示している場

合だけであり、両者が異なる場合には、次例のように“antes de que+接続法過去”の形式になる。

c. 私はお客が到着する前にこの袋を買った。

Compré	esta bolsa antes de que	llegaran los invitados.
“comprar 買う”ps.1sing.	“antes de que...～する前に”	“llegar 到着する”接続法過去
I-bought (ps.)	this bag before of that	arrived(接続法過去) the guests

(28) (私は)彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。

Yo	sabía	que	
	“saber 知る”imp.1sing.	“接続詞 ～ということ”	
I	knew (imp.)	that	
él (a)	había comprado/(b) compró	esta bolsa en el mercado.	
	“comprar 買う”pcp./ps. 3sing.		
he	(a) had bought/(b)bought(ps.)	this bag in the market	

いわゆる「時制の一致」現象の確認のための項目である。スペイン語の「時制の一致」の（学校文法的）規則では、(28)のように従属節事態が主節事態に先行する場合には a の pcp.が用いられる、とあるが、実際には b のように ps.が出現すること多い¹⁶。

参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio (1984): *Estudios de gramática funcional del español*, Madrid, Gredos.
- Butt, John & Carmen Benjamin (2000): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, London, Arnold.
- García Fernández, Luis (1998): *El aspecto gramatical en la conjugación*, Madrid, Arco/Libros, S.L.
- (dir.) (2006): *Diccionario de perífrasis verbales*, Madrid, Gredos.
- Gómez Torrego, Leonardo (1988): *Perífrasis verbales*, Madrid, Arco/Libros, S.L.

¹⁶ この点については Yamamura (2000)を参照されたい。

- Marín, Rafael (2004): *Entre ser y estar*. Arco/Libros.
- Real Academia Española (=RAE) (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe.
- Rojo, Guillermo & Alexandre Veiga (1999): “ El tiempo verbal. Los tiempos simples”, en Bosque, Ignacio. & Violeta Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe, pp.2867-2934.
- 高垣敏博(2000):「〈estar+過去分詞〉と〈テイル文〉—結果相解釈をめぐって」,『日本語とスペイン語(3)』 pp. 67-93, 国立国語研究所編, くろしお出版.
- Yamamura, Hiromi (2000): “Nuevo acercamiento a la concordancia de tiempos en español---con especial referencia a la interpretación propuesta por Carrasco Gutiérrez (1998)”, *Lingüística Hispánica* 23, pp.109-131.
- 山村ひろみ (1994):「複文における indefinido と imperfecto—過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察」, *HISPANICA* 38, pp.120-136.
- (2009):「スペイン語の未遂表現—“por poco+動詞”と“casi+動詞”」*HISPANICA* No.53, pp.83-104.